

HCニューズレター

No.21

Human Care News Letter

2020年3月 日本ヒューマン・ケア心理学会

学会新体制の発足



日本ヒューマン・ケア心理学会
第八期会長 遠藤 公久先生

第八期会長に選出されて

日本赤十字看護大学 遠藤 公久

第七期に続き会長をお引き受けることになりました。第六期から三期連続して会長をお引き受けることに、相当のめらいがございました。果たしてどの程度本学会に貢献できてきたのか、より魅力的な学会にできているのだろうか、また同じ人間があまり長く同じポストに就くことはマンネリズムに陥らないだろうか、不安が尽きません。

これまでの六年の間、①学術活動の活性化、②学会誌の充実、③研修の拡充、④現会員に向けた広報の迅速化（HPなど）、そして⑤会員数の増加に向けた広報活動の推進、を達成目標に掲げてきました。成果については、会員皆様に委ねざるを得ません。敢えて自己評価と今後の展望を以下に記します。

①学術活動の活性化：関連諸学会と共同で学術会議を数回開催してまいりました（最近では健康心理学会）。その結果、共同開催のメリットとデメリットを知ることができました。今後モチャンスがあれば、また会員の皆様にとってメリットが多いようであれば検討していきたい考えます。また、研究助成の制度を設けて2年になります。しかし、まだ周知されていないのか、応募が少ないように思います。是非ご活用ください。

②学会誌の充実：論文審査は、より迅速化が進み、掲載もスピードアップされていますが、まだ完全な電子化に至っておりません。また投稿論文数のさらなる増加のために、ご自身や周囲の院生など是非ともお声かけください。

③研修の拡充：研修については、年一回（学術集会のとき）開催されているだけです。魅力ある研修になっているかと思いますが、さらに拡充していくためには何が必要か、またベンディングになっている資格制度も検討が必要です。

④広報の迅速化（HP）：HPの刷新のスピードがアップしてきていますが、いろいろな意味でリニューアルが必要です。現在その方向で取り組んでおります。

⑤会員数増加に向けた広報活動：会員数の減少は本学会に限ったことではないようです。より魅力ある学会にするためには何が必要か、忌憚ないご意見をいただきたいです。

ヒューマン・ケアはケアする側される側の相互互恵的関係性の上に成立する行

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会 第22回大会のお知らせ 〈ヒューマン・ケアから考えるしあわせ〉

開催日程：2020年7月4日（土）～5日（日）

開催会場：広島国際大学呉キャンパス（詳細は第一号通信にて公表）

大会テーマ：「ヒューマン・ケアから考えるしあわせ」

・基調講演 「しあわせのメカニズム」

講師：前野隆司先生

・シンポジウム「しあわせを生み出す力」
（慶応義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科・教授）

・シンポジスト：大西 舞先生（呉市地域支え合いセンター 生活支援相談員・保健師）

・玉置妙憂先生（一般社団法人大慈学苑 代表理事・看護師・僧侶）

・田中秀樹先生（広島国際大学 健康科学部学部長・教授）

・前野隆司先生（慶応義塾大学大学院・教授）

・研修会テーマ「対話の力：生きること、死ぬことをめぐるヒューマン・ケア」

講師：田村恵子先生

（京都大学大学院医学研究科人間健康科学系教授・がん看護専門看護師）
ゲストスピーカー：玉置妙憂（一般社団法人大慈学苑 代表理事・看護師・僧侶）

今後のスケジュール

1. 演題申し込み 2020年2月1日（土）～3月31日（火） 発表論文集原稿提出
2. 抄録原稿提出 2020年2月1日（土）～4月18日（土）
3. 事前参加申し込み 2020年2月1日（土）～5月16日（土）

■抄録集は、大会受付でお渡しいたします。

大会のご案内：日本ヒューマン・ケア心理学会のホームページ参照

大会事務局：〒737-0112 広島県呉市広古新開5-1-1

広島国際大学看護学部（中村研究室）

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第二十二回大会事務局

TEL/FAX 0823173-8388

E-mail: 2020humancare@gmail.com

第二十二回 大会準備委員会委員長

山崎登志子（広島国際大学看護学部学部長・教授）

編集委員会より

機関誌「ヒューマン・ケア研究」は年二回発行しております。論文の投稿は随時受け付けておりますので、積極的な投稿を期待しています。執筆要項・編集規程は学会のホームページに掲載しておりますので、ご参照ください。ご不明な点などは左記機関誌編集事務局までお願いいたします。

Web担当からのお知らせ

学会のWebサイトは、下記の通りです。
<http://www.j-hc.jp>
なお、現在会員向けに限定したサービスとして「ヒューマン・ケア研究」に掲載されている記事（2000-2019 No.1）のPDFが学会Webサイトからダウンロードできるようになっております。ご利用の際には以下のIDとパスワードを入力する必要があります。また、このパスワードは会員以外にはお知らせにならないようお願いいたします。

ID:HC2020 パスワード: F3m9t (Web担当 羽鳥健司)

編集後記

選挙管理委員長をお引き受けした第八期役員選挙では皆様のご存知の出来事がありました。会員の皆様の暖かさが骨身に沁みしています。不思議な縁で来期も私が広報委員長を仰せつかりました。お引き受けしたからにはきちんと取り組んで参る覚悟です。本学会は発足以来二十一年が経ち、徐々に伝統が出来上がり、世代交代が進み始めています。偉大な先輩方の熱い想いを基盤にしながら、新しいことにも挑戦していきたいです。益々発展させていきたいと思っておりますので、皆様の変わらぬご指導ご支援をお願い致します。

今年は、広島国際大学の山崎登志子先生のもとで学術集会第二十二回大会が開催されます。上記の記事と、大会第一号通信をご覧いただき、皆様には是非ともご参加下さいますようお願い申し上げます。（広報担当 羽鳥健司）

学会事務局および機関誌編集事務局の連絡先は次のとおりです。

●学会事務局
〒150-00012 東京都渋谷区広尾4-1-13
日本赤十字看護大学 遠藤公久研究室気付
Tel & Fax: 03-3409-0914
E-mail: humancarepsy@redcross.ac.jp
●機関誌編集事務局
〒680-85576 宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学大学院教育学研究科 安保研究室気付
「ヒューマン・ケア研究」編集委員会
Tel & Fax: 022-795-6149
E-mail: amb@sed.hokuk.ac.jp

為です。本学会は、他の学会にないこのケア心理学の叡智を蓄積してきています。今後も、各方面の実践に、この叡智が活かされるように提言していきたいと思っております。

さて、第八期理事（左表）には、多くの若手の先生方に加わっていただきました。それにゆえに、不慣れでご迷惑をおかけすることもあるかもしれません。しかし、その反面、フレッシュな面々で、新しい学会づくりのために頑張ってまいります。我々一人一人にとって意味ある学会にしてまいります。

日本ヒューマン・ケア心理学会 第八期理事一覧

顧問	小玉 正博	埼玉学園大学
会長	遠藤 公久	日本赤十字看護大学
副会長	安保 英勇	東北大学
	石川 智	杏林大学
	石村 郁夫	東京成徳大学
	今井田 貴裕	甲南大学
	梅村 美代志	聖徳大学
	大場 良子	埼玉立大学
	長田 久雄	桜美林大学
	片山 富美代	桐蔭横浜大学
	木村 登紀子	いちかわ野の花心理臨床研究所
	北田 雅	京都大学
	小泉 隆平	近畿大学
	小正 浩徳	龍谷大学
	佐居 由美	聖路加国際大学
	清水 裕子	香川大学
	羽鳥 健司	埼玉学園大学
	中込 さと子	信州大学
	西嶋 雅樹	島根大学
	山崎 登志子	広島国際大学
	山内 朋子	日本赤十字看護大学
監事	島井 哲志	関西福祉科学大学
監事	中村 恵子	東北福祉大学

五十音順

日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会 第二十二回大会を終えて

桜美林大学教授 長田 久雄

国際大学での開催が予定されております。多くの皆様にご参加頂き、活発な大会になることを祈念しております。

大会企画シンポジウム

「痛みに対する

ヒューマン・ケアアプローチ」

二〇一九年六月十六日 東京千駄ヶ谷の桜美林大学四谷キャンパスで日本ヒューマン・ケア心理学会 第二十二回大会が開催されました。大会企画シンポジウム「痛みに対するヒューマン・ケア・アプローチ」では疼痛治療に対する心理的アプローチを紹介していただきました。

始めに順天堂大学医学部附属順天堂医院麻酔科ペインクリニック講座の井関雅子教授より「慢性疼痛を適切に評価し、最良の治療に結びつけるために」と題して基礎的な痛みの定義・分類・発生機序についてご講演いただきました。侵害受容性疼痛や神経障害性疼痛など痛みの種類があることや「痛み」には多種多様な痛みの表現方法があること、その評価の仕方一つでは無いということを学びました。「痛み」が感覚と同時に情動でもあるということに驚きを覚えた方も多かったのではないのでしょうか。他人の痛みを理解することの難しさに思いを馳せた方もいらっしゃるかもしれません。

次に順天堂大学医学部附属順天堂医院麻酔科ペインクリニック臨床心理士の村上安壽子先生に「慢性疼痛疾患における臨床心理士の重要な役割と身体疾患への今後の応用可能性」と題して、慢性痛の心理社会的な側面について具体的な症例を挙げながら解説をしていただきました。臨床経過が長くなるにつれて「痛み」の感覚面よりも心理社会面の影響が強くなること、患者とのやり取りで医療者が消耗しやすいこと、医療者と患者の信頼関係を構築することが困難な状態でスタートを切ることが一般的な心理臨床のケ

痛みとヒューマン・ケア

二〇一九年六月十五日と十六日に桜美林大学四谷キャンパスで開催されました日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第二十一回大会を担当させて頂きました。私は、本学会には、設立、そして第一回大会から関わらせて頂いて参りましたので、二十年以上経過して、このような機会を与えて頂いたことに感謝申し上げます。大会参加者が五十七人、懇親会参加者が二十八人と、例年に比べて参加者数が少なかったことは残念でございました。事前の広報不足等を反省しておりますが、下記の通り内容的には充実した大会であったと、ご参加くださった先生方、準備の労をお取り頂いた皆様に心より感謝申し上げます。ヒューマン・ケアの領域は多岐に亘り、対象も多様です。そのような中で、今回の大会では、「痛みとヒューマン・ケア」をメインテーマにさせて頂きました。慢性疼痛に苦しむ方は多いと思われませんが、痛みのケアは、医学だけでなく、看護学や心理学が貢献する余地が、まだまだ多く残されている分野ではないでしょうか。私は現在、順天堂大学ペインクリニック講座に関わらせて頂いておりますが、そこでのカンファレンスなどでも、集学的アプローチが実践されております。そのようなことから、今回は大会企画シンポジウムのテーマを「痛みに対するヒューマン・ケア・アプローチ」とさせて頂き、カンファレンスで一緒にいる井関雅子先生、村上安壽子先生、杉山尚子先生、土居真太郎先生に、話題提供と指定討論をお願い致しました。

学会本部のご尽力により、今回の大会では、初日に当たる六月十五日には、研修会と学



大会委員長 長田久雄先生

スと異なると紹介されていきました。また、心理面のみに注視するのではなく身体疾患のスクリーニングも併せて行うケースが多いということも印象的でした。

最後に星槎大学大学院教育学研究科の杉山尚子先生に「痛みに対する心理学的アプローチ」行動分析学から慢性疼痛を考える」と題して、行動分析学を用いた痛みへのアプローチをご紹介いただきました。「痛みを「痛み行動」としてとらえることで客観的に評価できる対象とみなすことは、これまでの「痛み」の概念に大きなブレイクスルーを与えました。「痛み」が行動によって制御されるという考え方は理学療法による疼痛治療とも非常に親和性が高く、臨床の現場で特に取り入れていきたい概念だと思えます。講演では実際に行動を変容させて痛みを治療していく過程をご紹介いただき、痛み治療に対する心理学の大きな可能性を示していただきました。

(松弘会三愛病院ペインクリニック医師 土居真太郎)



シンポジウムの様子

自主企画シンポジウム

「健康生成論再考その1
―若手研究者の「陽来復」―

二〇一九年六月十六日に桜美林大学四谷キャンパスにて、自主企画シンポジウム「健康生成論再考その1―若手研究者の「陽来復」―が開催されました。この度のシンポジウムでは、健康生成論の中枢をなすストレス対処・健康持続能力概念である首尾一貫感覚 (Sense of Coherence, 以下SOC)の研究に取り組んでおられる三名の先生方より、これまでの研究結果や研究の展望についてお話を伺いました。

術委員会企画のラウンドテーブルを開催して頂きました。研修会は立正大学心理学部特任教授、鹿嶋真弓先生に「解決志向のデイスカッション手法を学ぶ」というテーマでお願い致しました。鹿嶋先生は、NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」で学級集団づくりや学級経営に関する内容でご紹介されましたが、問題解決に向けたデイスカッション手法のコツを知り、現場で実践するためのスキルを身につけるために、大変有意義な研修をしてくださいました。学術委員会企画ラウンドテーブルでは、清水裕子先生、小玉正博先生、中込さと子先生、遠藤公久先生のご企画で、ヒューマン・ケアと結びつきの強いスピリチュアルケアに関して取り上げて頂くことができました。

二日目の六月十六日には、特別話題提供として、「JUGO」共和国のナズイリでの実践を通して、高齢期における精神面での問題・原因と対策を、アクデニズ大学のイスミール・トゥファン先生と村上育子先生にお話し頂きました。一般演題としては、六演題の口頭発表、十三演題のポスター発表 一件の自主企画シンポジウムをして頂きましたが、ご協力くださった先生方に御礼申し上げます。優秀口頭発表賞として宇野あかり先生と今井田貴裕先生、優秀ポスター発表賞として阪無勇士先生が選出されましたが、お祝い申し上げます。

次回の第二十二回大会は、山崎登志子大会長の下、広島

アントノフスキー博士 (1987)によって提案されたSOCは、これまでの医学モデルに依拠した疾病生成論に対して、「健康はどのように回復し維持・増進されるのか」という新たな発想から生まれた理論であることから、私自身も医療職の立場として興味深く聞かせていただきました。

雲財先生による「SOCの三要素を弁別する試みと限界」や、磯和先生による「他概念との関係から見るとSOCの尺度の限界点」についての話題提供では、SOCの構成要素である把握可能感、処理可能感、有意味感に対して、独自性とバランスに注目した検討が必要であること、SOCを測定する既存尺度の限界を課題に挙げ、今後の展望として理論的実証的に再考する必要性があることが強調されました。

今井田先生による「心理臨床に役立つ汎抵抗資源を探求して」のなかでは、汎抵抗資源 (GRR)とSOCを媒介変数としたストレス反応の緩和モデルの実証的研究などが紹介され、対象が抱えるストレスの度合いによって、モデルの適合度に影響があることが示されておりました。この実証研究における健康生成モデルでは、一般大学生は適合度が悪く、その一方で、高負荷のストレッサーに対する対処を要する看護師は、ストレッサー下でもモデルの適合度がよいという結果が、SOCの特性を示しており、面白いと感じました。

SOC概念の端緒は、過酷な環境下で生還した人々に共通した要素として生み出された概念であるため、強いストレッサーを多く受けている対象者への研究は意味深いと感じています。今回のシンポジウムを通じて、ヒューマン・ケアにおけるSOCの研究について考える機会となり、今後さらなる健康生成論研究の発展に期待したいと思います。

(埼玉県立大学 大場良子)

特別話題提供

「高齢期における精神面での
問題・原因と対策
―トルコ・ナズイリでの実践から―

研修会

「解決志向の
デイスカッション手法に学ぶ」

立正大学 鹿島 真弓

二〇一九年六月十五日に研修会が行われました。今回は立正大学の鹿島真弓先生をお招きし、「解決志向のデイスカッション手法に学ぶ」というテーマでお話いただきました。当日は対人援助職として従事されている方から多くの参加がありました。

はじめに、学校現場で行われる一般的なケース会議と今回のテーマであるブリーフミーティングの違いについてご紹介いただきました。ブリーフミーティングとは、学校内の先生の知恵が結集されてより良く問題解決がはかれる会議のことで、時間的負担の軽減や会議におけるゴールの明確化など、非常に効率的かつシステムティックであるとのことがありました。例えばケース会議で事例の報告をするとき通常なら長時間を要しますが、ブリーフミーティングでは五分間です。これは「困っていること」にのみ焦点化して報告することで大幅な時間短縮が可能になるとのことでした。ケース会議では、生育歴や環境要因についても重点的に検討する場合が多いのですが、ブリーフミーティングはそういった複雑に絡み合うものを追求し過ぎないか、あるいは取り扱わないことから、非常にスマートな印象を受けました。ブリーフミーティングには、短時間で効率的にケース会議を進める工夫が凝縮されていることを先生の説明で理解することができました。

続いて鹿嶋先生がカタリスト(Ⅱ進行役)として務められ、参加者から出された事例を基に三十分ブリーフィングのデモンストレーションが行われました。デモンストレーションでは適応指導教室に通室する生徒の事例が取り扱われ、実際に事例提供者には報告を五分以内で行ってもらいました。五分間の報告である以上、詳細な生育歴などは省略されますが、困っていることのみ報告することにより、現時点で解決すべきことが明確化されていました。事例報告の次はリソース探しの時間が十分間設定されました。リソース探しでは、多様な観点からの情報収集が行われます。この時間で事例報告の際に不足していた情報が補填されました。次にリソース探しの時間で集まった情報からゴール設定を行いました。ゴール設定では、具体的に現実的な目標であることが条件であり、「くしくない」といった否定的なものや、抽象的なゴール設定となった場合はゴールメンテナンスを行い、内容を肯定的なものへ修正することが重要であるとのことでした。ゴール設定ができたら解決のための対応策を考えました。何をどうすれば良いか明確な策が出た場合は、そのままゴールとなりますが、対応策が見つからない場合はゴール設定を見直しや、カタリストが発想の転換を促す形で介入する場合もあります。鹿嶋先生はお話していました。

第二十一回大会優秀発表賞 □頭発
「優秀発表賞を受賞して」

第二十一回 大会優秀発表賞 口頭発表部門

東北大学教育学研究科総合教育科学専攻 宇野あかり

この度は優秀口頭発表賞を授与して頂き、大変光栄に
 思います。調査に協力して下さった皆様、お世話になっ
 ている大学院の皆、日頃から親身にご指導して下さる安保
 英勇先生はじめコースの先生方に深くお礼申し上げます。
 大会期間中には、多くの先生方から貴重なご意見ご感想
 を頂きましたことも、併せて感謝申し上げます。

現在は緩和ケア領域を対象に、スタツフの心理的適応のプロセスを、特に「死のとらえ方」と「時間的展望(個人の心理的な時間のとらえ方)」という二つの観点から検討しております。緩和ケアでは患者の死が常に身近にあることで、スタツフの心理的負担が大きいことが指摘されています。一方で、そのような環境にいるからこそ、スタツフは自らの人生を眺め渡し、過去・現在・未来を日常的に深く考え、時間的展望を発達させている機会を得ていることに注目しました。このように、「死」が日常的な環境に身をおくことが、自身の人間的成長に繋がるという気づきを得ることで、スタツフの精神的健康の増進に寄与できればと考えております。本研究はその第一歩であり、今後も研究を積み重ねることで、微力ながらこの分野の発展に役に立てれば幸いです。

また、今回の学術委員会企画ラウンドテーブルでは、研究テーマとも近い「スピリチュアルケア」がテーマとされており、当日の先生方の話題提供や参加者の皆様のご意見は、大変勉強になる有意義なものでした。研究を進める上で参考にさせていただきます。

幸運なことには現在、緩和ケア病棟で患者さんへの傾聴ボランティアや家族教室のアシスタントとして活動しており、現場の様子を直に目にする機会を持つことができています。このような貴重な経験で得たことを、研究という形で多くの方に還元し、恩返ししていければと思います。研究者としても心理士としても、漸くスタートラインに立つか立たないかという次元で彷徨っている身分ですが、今回の受賞を励みにひたむきに精進し、社会に役に立つ人材になれるよう努めて参りたいと思います。



研修会の様子

研修会の様子

実際に三十分ブリーフミーティングを経験してみても、私個人が実感したことは、キャリアや専門性の垣根を越えて、参加者全員が発言しやすい環境になっていることでした。ブリーフミーティングは時間的負担の軽減や会議進捗の効率化だけでなく、参加者自身もクリアな気持ちで臨める、会議の新しいカタチであると思いました。

(狛江市教育研究所 宮戸悠貴)

学術委員会企画ラウンドテーブル
「ヒューマンケアとスピリチュアルケア」

学術委員会企画ラウンドテーブル

二〇一九年六月十五日、桜美林大学四谷キャンパスにて、学術委員会企画「ラウンドテーブルスピリチュアルケアアクト」が開催されました。ラウンドテーブル「ヒューマンケアとスピリチュアルケア」では、スピリチュアルケアに携わる心理学／看護学の研究者や専門家の四名の先生方から講演を伺い、研修参加者との意見交換を行いました。

遠藤公久先生(日本赤十字看護大学看護学部/教授)からは、ヒューマンケアとスピリチュアルケアについてご紹介いただきました。スピリチュアルケアの導入として、スピリチュアリティの考え方、ヒューマンケアとスピリチュアルケアの関係性についてご教示いただきました。

木村登紀子先生（いちかわ野の花心理臨床研究所）か

第二十一回大会優秀発表賞 □頭発
「優秀発表賞を受賞して」

第二十一回大會優秀発表賞 口頭発表部門

甲南大学文学部・国際心理支援協会 今井田 貴裕

日本ヒューマン・ケア心理学学会術集会第二十一回大会において『首尾一貫感覚の構成要素に着目した健康生成モデルの検討ー有意味感がストレッサーの評価を規定する?』と題した口頭発表に対して優秀発表賞を賜りました。研究へのご示唆や審査をして頂いた先生方と丁寧な指導をして下さった指導教授の甲南大学の福田義一先生に、改めて深く感謝と御礼を申し上げます。

本研究では、資源を動員してストレッサーに対処する能力である首尾一貫感覚の三つの下位要素(把握可能感・処理可能感・有意味感)に注目しました。把握可能感はストレッサーに対して構造的に知覚できる感覚、処理可能感は内外の多様な資源を動員してストレッサーに対処することが可能であるという感覚、有意味感感は一対一のストレッサーの対処に意味を見出せる感覚と定義されています。これらは、ストレッサーへの対処を通じて発達していきますが、把握・処理可能感と有意味感とは異なる性質を持つ可能性が先行研究で示唆されています。有意味感が強い人々は、ストレッサーに対して能動的に対処しようとするため、必要な資源を積極的に探求して動員しようとすることが指摘されています。そのため、有意味感がストレッサーの評価と関係していると予測しました。クラスタ分析の結果、全ての群で有意味感が低くなると、ストレッサーの評価は低くなっていることが明らかになりました。以上から、有意味感こそがストレッサーの評価を規定する決定的な要因である可能性が示されました。

私の心理臨床実践においても、トラウマティックなストレス経験による後遺症から回復する過程で、生きる意欲を出すべく、いろいろな工夫を凝らして、クライアントに出会うことが多々あります。今回の受賞を機に、今後はクライアントの首尾一貫感覚の回復に寄与する研究を行うことで、心理臨床家を中心とした実践家にとっても有用な報告をしたいと思っています。この度は、誠にありがとうございました。

らは、臨床実践の場におけるスピリチュアルケアの実際についてご紹介いただきました。医療・福祉・教育・産業・司法などさまざまな臨床実践の場においてスピリチュアルケアが必要とされていること、そしてスピリチュアルケアにおける「呼応」としてケアされることによってケアをする、ケアをすることによってケアをされるというケアの相互性についてご教示いただきました。

中込さんと子先生（信州大学医学部／教授）からは、遺伝性疾患とスピリチュアルケアについてご紹介いただきました。遺伝性疾患や人工妊娠中絶など人間の生に関することからスピリチュアリティやスピリチュアルケアについてご教示いただきました。

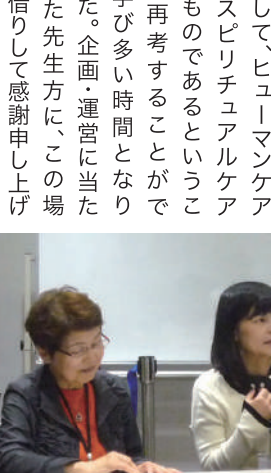
清水先生(香川大学医学部/教授)からは、看護教育としてのスピリチュアルケアについてご紹介いただきました。看護学生へのスピリチュアルケア教育の実際やドバイツのホスピスで行われているスピリチュアルケアの実際についてご教示いただきました。

際についてご教示いただきました。

四名の専門家の講演後、参加者との意見交換を行いました。講演前多くの参加者がスピリチュアリティを不明瞭に捉えていましたが、講演後には自身の経験からスピリチュアリティを説明し、スピリチュアルケアは何かをするという「To do」よりも共にいるという「To be」であることの重要性について意見を述べられました。



れました。



（香川大学 上原星奈）



ラウンドテーブルの様子

第二十一回大会優秀発表賞 ポスタ
「優秀発表賞を受賞して」

第二十一回大会優秀発表賞 ポスター発表部門

昭和学院短期大
阪無勇士

この度は優秀発表賞を授与して頂き、大変光栄に感じております。審査をはじめとして大会運営関係者の皆様、ならびに連名発表者である東京成徳大学石村郁夫先生には心より感謝申し上げます。

私はこれまで児童相談所一時保護所（以下、保護所に勤めながら、虐待を受けた児童支援を検討して参りました。保護所の実態は地域格差がありますが、虐待を受けた児童の集団生活の場であり、児童は自然と問題行動を示します。そして、支援と業務に追われる職員は、対応力を高める教育的なサポートを受ける機会が極めて少なく、自身の疲弊感を十分に癒すことのできないまま保護所の運営に携わります。特に、児童へと管理的に関わる事が許容される職員チームに所属する者ほどバーンアウトの傾向にあり、管理的な関わりを優先させます。さらに、管理的な関わりを受けた児童ほど、怒りや不安を問題行動として示す状況にありました。

このように、保護所における支援の悪循環を整理したとき、必要なことは批判ではなく、児童支援、児童を支える職員支援、そして、職員を支える組織の仕組みであることが自然と明らかとなりました。我が国ではこうした状況の対策の一として受容的な関わり的重要性が二〇一八年の一時保護ガイドラインに示されましたが、児童相談所運営指針が一九九〇年に提示されてから約三十年の間、児童支援に有効な職員の関わり方が問われる状況にあったといえます。

そこで本大会では、かねてより行ってきた受容的な関わりに関する研究成果を踏まえ、職員の受容的な関わりを高める研修を構想し、その研修効果の発表をさせて頂きました。研修前後で職員の受容的な関わりが高まるのみならず、児童の問題に気づき、受容的に関わりやすい組織を築こうとする意識・態度の高まることとなりました。職員への心理・教育的なサポートの重要性を改めて確認することができました。

今後もお、実践と研究を繋ぐ役目を担って参ります。今後ともご高配を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。